

「見てさわって遊んで学ぶ親子自然教室 in 三浦半島」

～ 併催「森里川海大好き！」読書感想文コンクール 2019 授賞式 ～
が開催されました。

子どもたちには、発見する力やいろいろな困難をのりこえる力が備わっています。それを発揮する場がないと、その力はいつの間にか衰え、なくなっていくのではないのでしょうか。

環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトでは、森・里・川・海で元気に遊ぶ子どもたちをよみがえらせ、森里川海を将来世代につないでいくことを目指しています。

主催 環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム

後援 葉山町教育委員会

日時 令和2年2月16日（日） 9：30～15：00 会場 相洋閣2階 大広間

自然体験プログラム運営 認定 NPO 法人オーシャンファミリー海洋自然体験センター
事務局 公益社団法人日本環境教育フォーラム

プログラム

開会挨拶 環境省「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」副チーム長 鳥居敏男



『森は海の恋人』という言葉がありますが、山に降った雨や雪が森のミネラルを海に流して、そこで海の生き物を育みます。その間には里があり川があり、畑やたんぼ、川の生き物を潤すということで、つながりを大事にしようという運動が、『つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト』です。（中略）自然の変化に目を凝らし、耳を澄ませて、自分が何をやらいいか考えていただけたらと思います。

今日は、自然に親しんで、楽しんで、自然が好きになってください。」という話がありました。

午前：大浜海岸で自然体験プログラム

当日はあいにくの雨でしたが、海岸を散策して漂着物を観察しました。参加者の子どもが、穴のあいている石を発見。それは二枚貝の穿孔でした。蛸、ヒトデ、ほら貝等、二枚貝を襲う生き物が海には沢山いるため、石に穴を開けて身を隠したのだそうです。



午前：生きもの観察と貝殻標本制作ワークショップ

潮間帯（海岸で高潮線と低潮線の間であり、塩の干満により露出と水没を繰り返す場所）にいる生きものを観察。前日に、阿部夏丸先生が捕まえてくださったという、モクズガニのメスも観察できました。

平磯ガニと磯ガニ、モクズガニ、筋エビもどき、ミミズハゼ、ウニ、ナマコ等、子どもたちは写真の通り、熱中して見入っていました。



その後、海岸で拾い集めた貝殻の名前を図鑑で調べて、貝殻標本を制作。中には、生きている貝もあり、大興奮する場面も見受けられました。大人も子どもも、見つけてきた宝物に向き合って、真剣に、そして楽しく学んでいたようでした。

昼食

具沢山みそ汁をいただきました。お店の方が大きな鍋を運んできて、その場で味噌汁を温めなおし、鶏肉、豚肉、お野菜等が入った具沢山みそ汁を頂きました。体の芯から温まりました。感謝です。

なお、中井統括官が持っているのが、三浦大根。こんなに太いのです。味噌汁の中に、すりおろされた大根も入っていました。



午後：読書感想文コンクール授賞式

午後には、読書感想文コンクール授賞式を開催しました。

森里川海大好き大賞（もっともすぐれた作品としての賞）				
『共に生きるために』	ミソラ 黒川海空さん	長崎県	長崎市立高尾小学校	5年生
森里川海ふれあい大賞（「もっと自然とふれあいたくなる」という視点での賞）				
『田んぼレストラン』	ミズホ 伊藤瑞穂さん	愛知県	豊田市立大沼小学校	5年生
森里川海つながり大賞（「森里川海と私たちのくらしのつながり」という視点での賞）				
『つながっている私達と森里川海』	ココネ 佐々木心音さん	神奈川県	清泉小学校	6年生

読本「森里川海大好き！」編集委員長の養老孟司先生から、賞状と副賞が授与されました。入賞者の子が緊張をしている姿を見て、養老先生は、「自然が好きな子は、おしゃべりがあまり上手なくていいな」と一言。おしゃべりが上手い子は、人の社会に適應できていて、それが自然に親しむというところと反するところがあるのだそうです。



森里川海のお話

「自然の中で輝く子どもたち」

児童文学作家 阿部夏丸先生

「自然は面白く、楽しく、不思議に満ち溢れたところ。学校の勉強も大事ですが、自然の中には答えが見つからないものもまだまだいっぱいある。いろいろなものを観察してほしい」

阿部さんがお話ししてくださったのは、カラスと会話した日のこと（カラスは賢い）、川での遊び、メダカが強い生きものであるということ、雄のメダカは背びれで雌のメダカ抱き寄せる等々。写真を使用しながら、楽しいお話をしてくださいました。少し紹介すると、メダカは全国に名前が5000程度（！？）もあるそうです。それは人間と距離が近い愛着のある魚であるがゆえ、地方、村それぞれの場所で呼び方があるのだそうです。また、メダカは海からやってきて、湿地に住み着いた魚で、バケツの中でも繁殖できる強い魚だと説明してくれました。ガラスの入れ物に入れて簡単にできるメダカの性質がわかる実験方法も教えてくれました。

「森里川海と私たち」

東京大学名誉教授 養老孟司先生

「若い人達は、自分が田んぼと畑とつながっていることがわからなくなってしまった」と養老先生は言います。農業は農業でちゃんとあって、誰かがやってくれている、と。でも実は、自分は田んぼのなれの果てで、森里川海からできているのだということをお話してくださいました。

国際化はいいけれど、この土地に張り付いている人はたくさんいて、大事なことは自分が張り付いている一部だということ。その感覚。日本人は感覚で生きてきた。でも都会は理屈が中心で、経済は理屈で考える。でもそろそろ考え方を変えた方がいいのではないか、ということでした。

自然体験を広める「えんたくん」ワークショップ

「大人も子どもも一緒に、自然体験を広めるにはどうしたらよいか、アイデアを出しましょう」という趣旨で、今日一日を振り返り、丸い段ボールの「えんたくん」に書き出していきました。子どもからは「冬の海岸にこんなにたくさん生き物がいたよ!」、親からは「人と自然のつながりがとても良く理解できました」との感想が上がりました。



閉会挨拶 環境省「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」チーム長 中井徳太郎

最後に中井統括官より挨拶がありました。

温暖化で災害が多発している。地球が大変である状況を説明し、人間が生命体として、生きものとしての力が削がれている。養老先生の都会という表現、自分たちがビルを作って、生きものをないがしろにして、便利だろうって。そういうことをやりすぎた結果、生きもののシステムが壊れている。ここをもとに戻さないことには地球環境がダメになる、と話していました。

人間は37兆個の細胞できている。一個、一個細胞が生まれ変わっている。そういう人間の仕組み

と地球は同じ。今まで地下の石油を大量に引き上げて燃やして、地球の体を痛めてきた。人間の肺の機能をもっている膨大な森林を伐採して、都市化して、便利な生活を手に入れた。気づいてみたら、腎臓や肝臓に負担がかかる状況を作っていた。慢性病。生活習慣病。医者にかかってもダメ。自分で体質を改善しないといけない。すぐには治らない。病気と向き合う、地球を健康にしなければならない。ここ 30 年でやらないとダメ。生命のパワーを引き出すこと、それが森里川海のつながりの中で生きものの感覚を取り戻し、助け合って、自然に生きものの力がつながっているような社会に変えたい。と話し、会場の皆さん一人一人の協力をお願いしました。

.....